

社会医学研究会
2024 年度 活動報告書

目次

はじめのお言葉	3
ぬいぐるみ病院ボランティア	4
子ども食堂ボランティア	5
大和高田無料塾ボランティア	6
寺塾.....	7
ひろばの寺子屋	8
なかよし保育園ボランティア	8
レジニアクセサリーセクション	9
手話の会.....	10
学祭.....	10
小児科学習支援ボランティア	11
あとがき	12

はじめのお言葉

医療職者として社会に出してしまうと、肉体的かつ精神的にも忙しく、勢い目の前の患者さんではなく病気を見てしまう傾向は否めず。結果として、病気はよくなったけれど患者さんが心底から満足されていないという問題に陥りがちです。社会医学研究会（通称：社医研）の医大生たちは、医療に関わるボランティア活動を通して、患者さんへの対応姿勢を取り巻く背景も含めて学ぶことになるので、良い医師・良い看護師になるためにとても重要な経験となるでしょう。

私が社会医学研究会（通称：社医研）のクラブ顧問のお役を嶋 緑倫先生から引き継ぎさせていただいて、早5年が経ちます。今年のクラブ活動状況をご覧いただいてもわかるように、自分たちで病院や病院を取り巻く環境に関する問題点を話し合い、自分たちでできるボランティア活動を提案し実行する、主体性を持ったクラブです。ステキな『こころね』を持つ医大生たちが、医師となり看護師となって医療に携わる奈良医大の将来は明るく希望に満ち溢れています。

是非、現役・社医研メンバーの後述記事をご覧いただき、共有していただきたく思います。そして、今後とも社医研のボランティア活動を温かい目で見守ってくだされば幸いに存じます。

2025年3月

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

主任教授 北原 紬

ぬいぐるみ病院ボランティア

医学科3年 垣本月海

ぬいぐるみ病院では、ぬいぐるみを患者さんに見立て、子どもたちにその保護者となってもらい、学生が医師や看護師となり、お医者さんごっこをする取り組みです。子どもたちに病院に対しての恐怖心を少しでも無くしてもらうこと、自分自身の健康について興味を持ってもらうことを目的としています。

今年度は夏休みにひかり保育園で、秋にイオンモール橿原でのイベントや学祭で活動させていただきました。子どもたちは、聴診器を使って実際に心音を聞くことや、ぬいぐるみに注射する、包帯を巻くなどの診察を笑顔で楽しみながら行っていました。子どもたち自身から、診察が終わった後に「手洗いうがいをきちんと毎日しているよ」、「診察楽しかった」といったような声をかけてくれることもあり、私たち学生も嬉しく思い、やりがいを感じています。

最後になりましたが、ひかり保育園の職員の方々、保護者の皆様などぬいぐるみ病院の活動に協力してくださった方々に感謝申し上げます。今後も、子どもたちが楽しく病院について知ったり健康について考えたりするきっかけになれるよう、活動を続けていきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。



子ども食堂ボランティア

医学科3年 佐野直樹

子ども食堂ボランティアは主にフードバンク大和高田さんが主催するひとり親世帯応援企画に学生ボランティアとして参加する活動です。昨年度は7/21(日)、12/22(日)、そして3/2(日)の計3回開催されたものに、学生ボランティアとしてたくさんの部員が参加してくれました。

ボランティアでは各ブースの手伝いをしました。例えば食材ブースでは利用者の方に食材を渡す手伝いをしたり、工作ブースではおもちゃの作り方を実際に子どもたちに教える役になりました。また、ありがたいことに数年前から企画内に社医研が自由にできるブースをいただけることになり、前もって部員達とブース内容を考え当日に向けて準備をしました。季節に合わせた企画をすることを目指しており、例えば夏だとスイカ割りの疑似体験ができるブースを開いたり、春だとひな祭りに合わせたゲームが楽しめたりするようにしています。参加した子どもたちが楽しんでもくれたのはもちろんのこと、親御さんも子どもの様子を動画に収めたりとブースに来てくれた全員を楽しませることができました。

この活動は利用者の方と接することのできる貴重な機会であり、実際に参加してくれた部員からは、「子どもたちが元気いっぱいかわいかった」「実際の利用者が自分のイメージと違って驚いた」といった声を聞くことができました。これからも引き続き、多くの部員が参加して新たな発見をしてくれることを願っています。

最後になりますが、この場をお借りして参加を受け入れてくださっているフードバンク大和高田の皆様には厚く感謝を申し上げます。今後もよろしくお願いいたします。



大和高田無料塾ボランティア

医学科 5 年 山名智尋

大和高田無料塾ボランティアでは、大和高田市で行われている「中学生友の会」という活動に参加させていただいております。この活動では、月に 2 回、中学生と一緒にスポーツをしたり、勉強を支援したりしています。

この塾が開かれた経緯について説明させていただきます。日本には、部落差別という人権問題があり、かつて一部の人々が住む場所、仕事、結婚など生活のあらゆる面で厳しい制限を受け、差別されていました。このような地域では、教育においても制限を受けていたため、すべての子どもたちが平等に教育を受けられるようにと、「中学生友の会」が立ち上げられたそうです。

この活動は、学習支援だけでなく、子どもたちの居場所づくりも目的となっています。活動前半のスポーツの時間には、バレーボールやサッカー、バドミントンなど、自由に体を動かして遊んでいます。一人で遊んでいることもあります。スタッフの方の声掛けにより、みんなで同じスポーツを始めるということもよくあります。特にチームを組んで試合をすると、自然と会話が増え、失敗してもみんなで笑いながら楽しんでいます。また、スポーツの後はホットドッグなど軽食をみんなで会話しながら食べることもあります。このような何気ない関わりから、信頼関係が少しずつ築かれ、子どもたちが心を許して安心したり、相談したりする場所になっていっていると感じています。

活動に参加させていただくと、子どもたちと話したり遊んだりすることで元気をもらいますし、学習支援をしているときに「そういうことか！わかった！」といってもらえると嬉しい気持ちになります。また、スタッフの方からは、子どもたちとの向き合い方や支援活動の重要性などを学ばせていただいております。今後も子どもたちとのコミュニケーションを大切にしながら活動に参加させていただきたいと考えております。



寺塾

医学科 5 年 藤井祐紀

寺塾は元々奈良医大生のサークルであるチーム PRE ドクターズが「教育を通して地域に貢献する」ことを目標に掲げて運営していた個別指導塾です。チーム PRE ドクターズのメンバーが 6 年生だけになり、このままでは塾を畳まなければならない状況であることを寺塾の前代表から相談され、社医研が運営を引き継ぐことになりました。

運営の引き継ぎは社医研内から運営メンバーを募集し、春ごろから講師として授業に入りつつ運営の業務内容を分担して一つ一つ覚えていくことから始まりました。当初は不慣れにこなしていた運営陣も、前運営の協力もあり徐々に業務を覚えていき、秋頃に運営業務の全てを引き継ぎました。

運営を引き継いで以降は現状の寺塾の問題点の改良を努めていきました。例を挙げると、大半が 6 年生だった講師陣の新たな人員の確保、前運営では手が回っていなかった建物の管理、事務や会計といった運営業務の効率化、個人の裁量に任されていた制度の画一化などがあります。現在はどのようにすれば利用者に満足してもらえるのか、少しでも長く寺塾を利用してもらえるのかを考えています。授業の進め方や体験授業のあり方、講師間の情報共有など、すぐに最善が思いつくわけではありませんが、運営陣一同で話し合い、寺塾の利用者にとって、また働いてくれている講師にとってもより良い塾となるような運営を心がけています。

寺塾を引き継いでおよそ一年が経過しました。寺塾は社医研の他のボランティア活動と違い、利用者とのお金のやりとりが直接発生する活動です。そのため運営には普段の活動より一層責任感が求められます。一つのミスが利用者からの信用を失いかねないことだと運営陣は肝に銘じておかなければなりません。

一方でこの活動も他と同様に人との繋がりが重要な活動であると考えています。生徒としっかりコミュニケーションをとり、保護者には真摯に対応することが寺塾の何よりの強みであるべきです。チーム PRE ドクターズが掲げていた「教育を通して地域に貢献すること」は受け継いでいかなければならない精神だと考えています。この目標を達成し利用者から寺塾でよかったと思っていただけるよう、運営のこれからの働きには期待しています。

最後になりましたが、私たちを信頼して寺塾を利用してくださる生徒および保護者の皆様、寺塾を支えてくださる地域住民の皆様、働いている講師の学生、そして私たちに寺塾を任せてくださったチーム PRE ドクターズの皆様に深く感謝申し上げます。一段と邁進してまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

ひろばの寺子屋

医学科 5 年 藤井祐紀

「ひろばの寺子屋」は、橿原市観光交流センター内の橿原市市民活動交流広場で、毎年夏休みに橿原市内の小学生を対象に開催されている企画です。橿原市内で活動する団体が講師となり毎年様々な講座が開催されますが、本年度は社会医学研究会に依頼があり、4名の部員が講師役として参加しました。

企画内容はよく飛ぶ紙飛行機やこまの折り紙、紙コップとポリ袋で作るパラシュート工作の作り方を教えたり、PP バンドで作った金魚釣り、BAGGO と呼ばれるニュースポーツと一緒に遊んだりしました。参加した児童が企画を楽しんでくれただけでなく、保護者も児童と一緒に遊んでいる様子も見られ、参加者の皆様に満足いただける企画となりました。

また、今回の企画を開催するにあたって、参加する学生と橿原市民協働課の皆様で直接打ち合わせをし、市役所の人から話を聞く機会があったり、自ら企画内容を考えたことは学生にとっても良い刺激であったと思います。

最後になりましたが、今回このような機会を用意していただいた橿原市民協働課の皆様、お越しいただいた児童および保護者の皆様に厚く御礼申し上げます。今回だけに留まらず、また講師として参加できる機会を心より願っています。



なかよし保育園ボランティア

医学科 2 年 藤原奈津希

なかよし保育園とは、奈良県立医科大学に勤務される職員の方々のお子さんが通われている施設です。私たちは、放課後 17:00～18:30 まで、なかよし保育園の子どもたちと一緒に遊ぶ活動をしています。

おままごとや絵本の読み聞かせと遊びは多岐に渡ります。活動参加回数が増えると、子どもたちが名前を覚えてくれたり、おもちゃを仲良くみんなで使えるように成長した姿を見られてとても嬉しかったです。

この活動を通して、こどもたちの安全を確保しながら指導する保育士さんの姿を拝見できて、大変勉強になりました。また、こどもたちの笑顔に間近で触れられることに非常にやりがいを感じました。

最後になりましたが、なかよし保育園の園長先生をはじめスタッフの皆様、ならびに学生の活動を心優しく見守ってくださる保護者の皆様、そして何より保育園の子どもたちにこの場をお借りして感謝申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

レジンアクセサリーセッション

医学科 5 年 藤井祐紀

レジンアクセサリーセッションは月に数回希望者が集まり、レジンを使ったアクセサリーづくりの練習をします。初めはレジンの扱い方から始まり、慣れてきたら作品作りにも挑戦してもらいます。参加者は経験者もいれば、多くは大学に入ってから始めた人もいます。

この活動はコロナ禍の中で多くのボランティア活動への参加が制限され、このままでは部としての活動ができないばかりか部内の交流すらも無くなってしまうことを危惧した先輩によって始まった活動です。今年は他の活動が活発になるに従って徐々に活動頻度が下がってきましたが、それでもボランティアで配ることが習慣化してきたため、開催した際には部員達が用事の間隙を縫って参加してくれ、集中してアクセサリー作りに取り組んでくれています。

作ったアクセサリーは子ども食堂などのボランティアで配ります。子どもたちが喜んでアクセサリーを身につける姿は作品づくりのモチベーションに繋がります。子ども達に喜んでもらえる作品を作れるように、これからも腕を磨いていきたいと考えています。



手話の会

医学科 4 年 谷口尚陽

手話の会では毎週木曜日の昼休みに大学内の教室で昼食を食べながら、みんなで手話を学んでいます。

活動内容としては、先輩に作っていただいた過去の動画を観ながら真似をしたり、手話の本を見ながら動きの確認をしています。さらに覚えた手話で実際にコミュニケーションをとり、自然な形で手話が使えるように練習しています。

その他にも「聾」を扱った本の紹介や希望者への貸し出しを行っており、手話の背景にある「聾教育」や「聾文化」について知ってもらい、あらゆる面から手話について学び、考えてもらえるようにしています。



学祭

医学科 3 年 垣本月海

今年度の大学祭において、社会医学研究会は計 20 名の部員が協力し、メニュー決定や運営、計画などの過程を経て、エッグワッフルを販売しました。大学祭は学内の学生と交流するだけではなく、地域の方々とも関わることでできる貴重な機会です。私たちは多くの人に来ていただくことができるように、商品の大きさやラッピング、トッピングの豊富さなど様々な観点から工夫を凝らしました。2 日間で多くの方々に商品をご購入いただき、来てくださった方々にも好評でした。私たち自身も商品の作成や販売を楽しんで行っていました。

出店の過程を学び、実際に運営することは、今後様々な活動に関わっていく中での良い経験値となると考えています。来年度以降も大学祭での出店を通して学生や地域の方々との交流を広げ、そして深めていけたらと考えております。今後ともよろしくお願いします。



小児科学習支援ボランティア

医学科 5 年 柴田和美

小児科学習支援ボランティアは奈良医大の小児科病棟に入院している白血病などの長期入院の患者さんがいる時に学習支援のボランティアをしています。

小・中学生は義務教育であるため院内学級などがありますが、高校生は義務教育ではないため、長期入院による公的な学習支援が十分ではありません。社会医学研究会ではそのような高校生のために学習支援を始めました。患者さんの要望に応じて曜日や時間の他、頻度・科目・進度を決め、ボランティア参加者でシフトを組みながら行っています。

直近では 2019 年に白血病の患者さん（高校生）の学習支援を行っていました。新型コロナウイルス流行後は現状要望がないので活動は休止の状態となっています。現在は病院が患者さん向けに Wi-Fi を契約していただいているので、個人情報の扱いに気を付けながら zoom などを用いた学習支援も考えています。

あとがき

昨年に引き続き、今年も活動報告書を発行することができました。各活動の代表者の方々に執筆をお願いしています。快くお引き受けくださりありがとうございました。このように各活動の様子をまとめることは、いつもお世話になっております北原教授、OB・OGの方々に今の社会医学研究会の様子を報告すると共に、新たな活動を含めて現役部員に対し様々な活動を知らせていき、社会医学研究会をますます発展させていく良い機会になればよいと思っています。

今年は14人と例年通りの新入生が入部してくれ、また去年入部した部員の多くが今年度も活動を継続してくれたことにより、去年からの部内の活気を引き継いだ状態で今年の活動に臨めたことは大変喜ばしい限りです。活動している部員達の多くが複数の活動に参加しており、部員の中から社医研の未来を担う存在が出始めていること、部内にも上下の繋がりが着々と築かれつつあることを実感しています。先輩が守ってきたこの部活を後の代へと繋いでいけるよう、部員一同いっそう励んで参ります。

私自身も代表の2期目を務めることとなり、社医研の活動を発展させていくことを目標に活動に参加していました。結果として、今年度は昨年の活動に加えいくつかの活動を新たに行う機会をいただきました。他団体から引き継いだ活動や人の縁によって関わらせていただいた活動、企画を一から考えた活動など、形は様々なありましたが、大変ながらも貴重な経験を多くさせていただきました。また、新たな活動を始めるにあたってその活動を定着させ継続していくことの難しさを痛感しました。

ボランティアとは、この言葉が持つ本来の意味の通り個々人が自発的に参加することで成り立つものであり、誰かに強制されるものではありません。そのため、活動に参加する理由は自分で作らなければならないことはこの部活を続けていくことの一つの障壁となります。ただ、学生の間からこの部活に参加してくれた部員達には医療人となる上で間違いなくこの経験が活きる場面が訪れると信じています。参加の理由は活動への興味・関心であったり、人と人とのつながりであったり、あるいは単に暇を潰すためだったり、人によって様々です。どんな理由であれ、ボランティアに参加することで自分の知らない世界に触れ、新たな気づきを獲得し、各々の将来の礎としてほしいと願っています。

最後に社会医学研究会の活動を運営するにあたって、北原教授をはじめ、OB・OGの方々、先輩方、部員のみなさん、外部で協力してくれた人達など、多くの方々に支えていただき本当にありがとうございました。今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しく願い申し上げます。

2025年3月
社会医学研究会 元代表
医学科5年 藤井祐紀